

世話焼き男の
物作りスローライフ

Sewayakietoko
no monodukuri
slow life

悠木コウ

Yuki Kou

Illustration 又市マタロー

???

不思議な空間
『記憶の図書館』に現れた男性。
ユータの前世を知る。

アニス

伯爵家お抱え商家の娘。
ユータの発明品に興味を持つ。

エレノーラ

ユータの母。
ブロンドの髪美人。
お菓子や紅茶を好む。

デルバード

ユータの父。
エーベルの街を治める伯爵。
しっかり者だが親バカ。

ニーナ

伯爵家に仕える
心配性なメイド。
ユータを我が子のように思う。

カイル

ユータの兄。
剣の腕前は大人顔負け。
どこまでも脳筋。

アイリス

ユータの妹。
遊び盛りで元気いっぱい。
甘え上手。

ユータ

本編の主人公。
日本から転生した元おじいさん。
家族思いの世話焼き。
魔導具の発明に挑戦する。

MAIN CHARACTERS

主な登場人物

ブローグ

自分が生きている今を、夢かもしれないと思うことがある。

だが、これは紛れもなく現実だ。

人として日本で生き、そして老衰で息を引き取った。それが約八十年生きた、湖上優太としての記憶。

そしてどういう訳か、自分は見知らぬ世界に新たな生を受け、ユータ・ホレスレットという名を与えられた。

運が良いことに、とある都市を治める貴族の次男として生まれ、家族から可愛がられている。

この世界には魔法や魔物というものが存在する。

文明の発展度は地球の中世ヨーロッパ辺りかと思いきや、当時の地球にはなかったはずの物があつたりもする。

世界が違えば文明の発展の仕方、進化の形も違うようだ。新たな発見ばかりの第二の人生は、七年が過ぎた今でも尚、心躍る毎日だ。

しかし、第二の人生も良いことばかりではない。

この世界の貴族には必要不可欠な魔法を、自分は全く使えないのだ。

魔法を使うには魔力が必要だ。魔力自体は自分の身体にもある。

体内を「何か」が流れている感覚があり、その「何か」は自分の意思で動かすことができる。例えば、腕の中にあるそれを、足の爪先まで動かすことなど、造作もない。

家族が言うには、その「何か」が魔力なのだそうだ。

普通はこの魔力が、詠唱文というものを唱えることで体外に放出され、魔法に変わる。

しかし自分の場合、何故か何度詠唱しても発動できない。

これは魔法適性というものがないのが原因らしい。簡単に言うと、自分には魔法を扱う才がないのだ。それは魔法を使うことが一般的であるこの世界では少々異端だった。

更に悪いことに、自分が魔法を使えない「無能」であることが、社交界デビューの日に知れ渡ってしまった。それが約二年前のことだ。

当時五歳だった自分は前世の記憶の整理ができておらず、転生したことも理解できていなかった。性格も今より年相応のもので、魔法が使えなくても不思議でも不便でもなかった。

そんな状態でも、幸先の悪いスタートを切ってしまったことは肌で感じられた。

共に社交界デビューした者や他の貴族達から嘲笑され、陰口も叩かれた。

魔法適性が全くない者など相当に珍しく、貴族であっても出世は望めない。

できて当然のことができないのだから、差別の対象になる。

だが、両親はそんな自分に失望したりせず、他の兄や姉、妹と同様に愛情を注いでくれた。兄弟も家族として認めてくれている。

そのことで、より一層家族を好きになったのは言うまでもない。

彼らがいなかったら、自分の第二の人生はきつと散々なものになっていたことだろう。

今日はいつもより早く目が覚めた。起床まで時間があるので、改めて自身の境遇を思い起こしてみたのだが、七年も経てば違う世界にも順応するものだ実感していた。

窓から差し込む日の光を浴び、身体を覚醒させる。

軽く伸びをした後、ベッドから出て身体を軽く動かした。もう少しで朝食だ。

自分はパンより米派なのだが、残念ながらこの世界で米はまだ見たことがない。

といってもホレスレット伯爵家が治める都市、エーベルの中に限った話だが。

世界は異なるが、日本にあった物を、この世界で見かけることも多い。

書物を読んだり、実際に街へ出てみたりして判明した。

なので、米も何処かにあるとは思うのだが、今は見つかっていない。

考え事をしながら身体を動かしていると、ノックの音が届いた。

「おはようございます、ユウ様。朝食のお時間となりましたので起床ください」

この声はニーナだ。

ホレスレット家に仕えるメイドの一人で、使用人の中では一番話すことが多い。

本名はユータだが、彼女のように、自分のことを「ユウ」と呼ぶ人もいる。母さん、姉さん、そして妹達がそうだ。

「着替えてから向かう」と返事をし、身じたくを済ませるとドアを開けた。

「お待ちしておりました。それでは、参りましょうか」

自分は戻っていいという意味合いで返事をしたのだが、ニーナは廊下で待っていた。

少々言葉足らずだったようだ。

「待たせてごめんね」

「いえ、私が勝手に待たせて頂いたのですから、お気になさらないでください」

「ありがとう」

今では見慣れた彼女の青い髪だが、前世と比較するとやはり珍しい色をしている。

彼女に限らず、この世界の人は髪色が大層鮮やかだ。

ちなみに自分は父の髪色を受け継いで銀色である。

「それじゃあ、行こうか」

ニーナに一言告げて一階に下り、ダイニングルームへ向かう。

後ろを付いて来ていた彼女だが、ダイニングルームに差し掛かった所で、前に出て扉を開けてく

れた。

中へ入ると、既にデルバード父さん、エレノール母さんとカイル兄さんの三人がテーブルにっていた。

セレア姉さんと妹のアイリスはまだ来ていない。

「おはよう」

朝の挨拶をしてから席についた後、遅れて姉さんとアイリスがやって来た。

全員が揃ったところで、食事が始まる。ホレスレット家の食卓は堅苦しくなく、賑やかだ。

こうして他愛のない話をしながら家族と食べるのは、今の人生の楽しみの一つである。

「そうそう、ユウ。魔導具に関する書物がいくつか手に入ったから譲るわ。後で私の部屋にいらっしやい」

食事が終わるやいなや、エレノール母さんがそう言ってきた。紅茶のカップを持ちながら微笑む

母の姿は、絵にしたくなるほどの美しさがあり、とても四人の子を持つ母親には見えない。

淡い緑色をした瞳も、腰まであるブロンドの髪も、母さんの美貌を引き立てている。

そんなエレノール母さんは、お菓子や紅茶を好んでいる。

「ありがとう、母さん。後で取りに行くよ」

自分はそう返すと、ダイニングルームから自室に戻った。

母さんの部屋に行く前に、少しやらなくてはいけないことがあるので、早速その作業に移る。

自分には伯爵家の次男として誇るべき能力がない。セラ姉さんや妹のアイリスのように魔法を使えたり、カイル兄さんのように剣術に優れていたりということがない。

それ故、自分は伯爵家に相応しくないのでは、いつも後ろめたさを感じてきた。

家族は無能と呼ばれても愛してくれているが、優しくされると尚更、自分も得意分野を見つけて、家のために何かしたくなる。

そこで考えついたのが、前世で集めた様々な知識を使い、この世界にない便利な物や楽しい物を作製しようということ。

それが自分の考え出した家族への恩返しだ。

幸い好奇心旺盛だった自分には多くの知識がある。加えて、元々誰かのために何かをすることが好きだったので、その延長だ。

本音を言えば、前世でももっと誰かの役に立つことをしたかった。しかし、年を取ってからは身体にガタがきてしまい、どうしても思ったようには動けなかった。

やり切れなかったことが心残りだったが、今の身体ならそれができる。

その最初の一つとして、アイリスのために絵本を作製中だ。妹のためだと思うとやる気が湧いてくる。

紙はそこまで高価ではなく、庶民でも簡単に買える。

しかし、安くなったのはここ最近の話だ。

高価だった頃、紙は専ら歴史書などの教養を育てる本に使われ、読み手も貴族に限られていた。

そのため、大衆娯楽である小説や絵本といった類の書物は全く存在しなかった。安くなった今もその文化が強く根づいており、文芸書などはまだ見かけない。

科学ではなく魔法が発達しているの、その影響もあるのだろう。

魔法があれば火をつけるのも水を生み出すのも、風を起こすのも簡単にできる。

その結果、この世界の人々は魔法に頼り切っている。地球の電力が、この世界では魔力に置き換わっている訳だ。

魔法は非常に便利だから、人は工夫をしなくなってしまう。

魔法があるから、地球では古くからあったような発明もなされないのだろう。

「ここで一旦切り上げようかな」

小一時間ほど机に向かい絵を描いた後、椅子から降りて背を伸ばした。

幼い身体は筋肉疲労の回復が早いので、節々の痛みがなくて快適だ。

歳を取ると立ち上がるのも一苦勞で、転んだだけで骨折する危険もあったから、安全や健康になり気をつけていた。今は健康体なので、少々気が緩んでいる。

せっかく前世の知識を受け継いでいるのだから、今から健康に気を遣った方がいいかもしれない。

だが、その前に魔導具に関する書物を受け取りに行かなければ。
ずっと待たせるのは悪いので、一階にあるエレノール母さんの部屋へ向かった。
魔導具を作れば、一層家族の役に立てるだろう。

第一話 妹と絵本

一階に下り、エレノール母さんの部屋へ到着した。

親しき仲にも礼儀あり。たとえ家族の部屋であっても、入る前にはノックをする。
両親から受けた躰の通り、母さんの部屋に入る前にノックをして声をかけた。

「母さん、ユータだけど。今いいかな」

「ええ、いいわよ」

部屋にいたメイドがドアを開けてくれたので、中に入ると礼を告げる。

「ありがとう、メイベル」

腰まである緑色の三つ編みを揺らし微笑みを返す彼女に頷き、椅子に座って紅茶を飲んでいる母さんのもとへ行く。

母さんはカップをソーサーに戻し、口を開いた。

「ユウが欲しかったのは魔導具の専門書だったわよね。カミラに持たせてあるのがそうだから、確認して頂戴」

先ほどドアを開けてくれたメイベル以外にもう一人、カミラというメイドがおり、彼女は数冊の書物を抱えていた。それが件の魔導具に関する本か。

カミラは膝を折って、本がよく見えるように自分の目の高さに差し出してくれた。

今の自分は百三十センチほどで、しゃがみこんだカミラにさえ見下ろされるほど、背が低い。前世では年老いても身長が百七十センチはあったので、女性に見下ろされることはなかったなと感慨深く思う。

「どうかなさいましたか？」

「カミラは背が高くなって……ごめん、気にしなくてもいいよ」

苦笑交じりに告げた後、簡単に書物の確認を済ませた。

確認が終わるとエレノール母さんは、カミラとメイベルに本を部屋まで持って行くよう頼んだ。一人で持っていけるのに何故二人に頼んだのかと考えていると、母さんに呼び止められた。

「どうしたの、母さん」

「えっと、そうね……最近、調子どう？」

「うん、母さん、何を思っただのセリフをチョイスしたのかな？」

最初こそぎこちなかったが、その後は無理をしてないかと気負わなくていいと言ってきた。

いつもなら物の受け渡しはメイドに頼むだけだが、今回自分をわざわざ部屋に呼んだのはこの話をしたかったからのようだ。

それに対し、無理はしてないとはつきり伝えると、母さんは納得していないような表情をした。何かできないかと考えているようなので、今のままでも十分に良くしてもらっていると伝えて部屋を出た。今度お菓子でも作って持っていこう。

変に気を遣われても困る。魔法が使えない自分にこんなに良くしてくれるのだから、自分は幸せ者だ。

前世の知識を使った家族への恩返しはまだ始めたばかりだ。

絵本を作ろうと思ったのも数日前だ。もう少しで完成なのだが、他にも作りたい物や作りかけの物がある。中でも気になるのが魔導具だ。

自分は既に文字の読み書きができる。

どのような原理か分からないが、自分はこの世界の言語を脳内で日本語に変換して読むことができる上に、日本語で書いた文字は様々な言語へ変換された。

魔法が存在するのだから、この力もおかしくはないのかもしれないが、それでも少しばかり異質だ。

何はともあれ、この謎能力のお陰で読み書きには苦労しない。

そしてその能力を使って書斎しやさいにある書物を読み漁あさっていた時に、魔導具の存在を知った。

簡単な情報しか書かれていなかったが、魔導具は魔導言語を刻むことで作る、という一文が載っていた。

詠唱ではなく、書いた文字を使うのであれば、自分にもどうにかできるかもしれないと思いつき、魔導具作製を試みたいと考えるに至った訳だ。

さて、今一度自分の置かれている状況を振り返りつつ自室に戻って来たのだが、誰かがいる気配がする。

カミラとメイベルとは先ほどすれ違っているのもその二人ではない。ドアを開けて部屋へ入ると、案あんの定じようある人物が机の前の椅子に座っていた。

「アイリス、また抜け出してきたの？」

部屋にいたのは妹のアイリス。年齢は自分の三つ下の四歳で、何かにつけてこの部屋にやって来る。

「これなくに？」

机に置きっぱなしにしていた作製途中の絵本を指差し、アイリスは可愛らしく首を傾かしげた。

エレノール母さんと同じブロンドの髪がふわりと揺れる。将来、母さんのような美人さんになるだろう。

「それは絵本だよ。アイリスのために作ってたんだ」
絵本を作っていたことは隠していた訳ではない。

できれば完成してから見せたかったのだが、バレたのならば教えてもいいだろう。

「絵本って？」

「絵本っていうのはね、……なんて言えばいいんだろう。えっと、可愛い絵のついた物語のこ
と、かな？」

「……？」

アイリスのような幼い子供でも分かる説明が、咄嗟には思いつかない。

そもそも、絵本が存在していないのだから当然だ。定義を説明しても意味がないし。

「とある国のお姫様が怖いドラゴンに連れ去られて、それを王子様が助け出す、みたいなお話を絵
にした本、分かるかな？」

とりあえず、今作製中の絵本の内容を説明してみた。

魔物の中でもドラゴンは、知らない人がいないほど有名だ。

アイリスでも知っているだろうと思い、ドラゴンを登場させた絵本を作っていた。

「面白そう！」

理解してもらえるか少々不安だったが、無事通じたようだ。

可愛い笑みを浮かべて作製途中の絵本を眺めている。

「まだ作っている途中だから、完成したら教えるよ。だから、まだ見ては駄目だよ？」

「うん、分かった！ 楽しみにしてる！」

無垢な笑みを浮かべる様子は子供らしく可愛い。

その後、アイリスと一緒に絵を描いていると、セレア姉さんがやって来た。

そういえば、アイリスが抜け出てきたことをすっかり忘れていた。

「やっぱりここにいたのね、アイリス。今は勉強の時間よ」

「いやー！」

「わがまま言わないのー！」

ズンズンと迫る姉さんから距離を取ろうと、アイリスは椅子を降りて自分の後ろに回った。

アイリスは勉強から逃げ出して、よく自分の部屋に来る。

勉強と言っても簡単な読み書きの練習程度だ。すぐ終わるのだが、やはり子供は勉強が苦手ら
しい。

自分が絵本を作っていたのは、そういうことも理由だったりする。

「ユウもアイリスに何か言ってみよう」

「うーん、そうだね……今日は勉強をお休みにしてもいいんじゃないかな？ このところ毎日勉

強だったから、アイリスも疲れてるんだよ」

セレア姉さんが助けを求めるように言ってきたが、自分はアイリスを庇った。

「明日になったら僕がなんとかするから。ね？ 今日だけは休みにしてもらえない？」

「……はあ、分かったわ。お母さんに今日は中止にするって伝えておくから、明日は絶対に勉強さ

せてよね」

「ありがとう、セレア姉さん」

なんだかんだ言って甘い姉さんに、肩をすくめて礼を言っておく。

姉さんが部屋を出ていき、ようやくアイリスが兄（兄弟）という盾から出てきた。

「アイリス、後でセレア姉さんに謝っておくんだよ？」

「……はい」

拗すねた返事をするアイリスの頭を撫なでる。勉強は嫌いだがセレア姉さんは好きなようで、二人はかなり仲がいい。

このままでも仲直りの必要すらないだろう。気分屋のアイリスだが、今まで喧嘩けんからしい喧嘩をし

ているところを見たことがない。

先ほどまで拗ねていた妹だが、もう上機嫌にお絵かきを再開している。

そんな妹の様子を時折窺うかがいながら、自分は魔導具製作書を読み始めた。

※ ※ ※

魔導具とは、素材となる道具に魔導言語を刻きみ、世界に溢れている魔力を用いて様々な現象を引き起こす物の総称。

道具に魔導言語を刻むと魔導具、衣服なら魔装まそうとなる。全てを魔導具と呼ぶと紛らわしいので、便宜上使い分けている。もちろん全てを魔導具と呼んでも間違いではない。

魔導言語とは、魔力がこめられた文字列のことだ。通常、魔導言語を書く際には古代人が用いていた魔導文字を使う。

魔導具を作製するには魔導文字の使用が必須ひつすだが、どの文字がどんな力を持つのか全て解明された訳ではない。

魔導文字を物に刻むと、体内から魔力が吸い取られ、その魔力によって文字は力を持ち、刻まれた文字通りの現象を引き起こす。

我々が普段使用しているアドルリヒト語も、魔力を注ぎながら刻むと魔導言語になる。しかし、基本的にアドルリヒト語は、魔導文字に比べ一単語あたりの文字数が多いため、魔導文字を用いた方が効率が良い。

更に、魔導文字を刻んだ魔導具とアドルリヒト語を刻んだ魔導具とで能力の比較をしてみたところ、圧倒的に魔導文字を用いた方が優れていたという実験結果もある。そういった理由から、アドルリヒト語で魔導具を作るのは推奨すいしょうしない。

アドルリヒト語でも魔導具を作れたことから、他にも文字に力を与えられる言語があると考えられているが、判明していない。

魔導具を作ること自体はさして難しくないが、そのためには魔導文字と、それを使った言葉の解

読が必要だ。

この書物を目にし、魔導具を作らんとする同胞達よ。君達の活躍を期待している。

※ ※ ※

「ふう……」

重要なことは大体理解できた。

魔導具を作るには、素材となる道具に魔力をこめた文字を刻めば良い。

要約すればそれだけのことだ。

そして、文章の合間に魔導文字の一覧が載っていたが、その数は膨大だった。

じつとそれを見つめていると、ある変化が起きた。なんと、ただの記号にしか見えなかった文字が脳内で翻訳され、どの文字がどんな意味を持っているのかを理解できるようになったのだ。

我ながらすごいと思うのだが、この力のせいで自分は魔法を使えないのでは？ と邪推してしまふ……いや、もっとポジティブに考えよう。

この力のお陰で魔導具を作れるかもしれない！ そう、こういう考えでいいんだ。

現存する魔導具は少なく、王族や貴族、大商人などが持っているらしい。

書物の記述にもあったように、この世界の一般的な言語であるアドルリヒト語でも魔導具は作れ

るのだが、その性能は魔導言語で作った物に大きく劣る。

どれほどの差があるのかは明確に書かれていなかったが、推奨しないと書かれていたからには、アドルリヒト語で作った魔導具は使えないと見ていいだろう。

ちなみに、アドルリヒト語は現代日本に置き換えるなら標準語のようなものだ。

取り敢えず、自分はこの書物にある魔導文字を理解することができた。それが重要だ。

早速実際に刻んで魔導具を作ってみたいところだが、お絵かきをするアイリスを放っておく訳にもいかない。

魔導具は一人になった時に作ろう。その前に絵本の仕上げをしなくてはいけないかな。

「ユウ兄さま、絵描けた〜」

「おっ、上手く描けてるね。流石アイリスだ。でもね——」

アイリスが見せてくれた紙には、微笑むセラ姉さんが描かれていた。

だが、少々姉さんらしくない箇所もある。

「——この頭部にある二本の突起は何かな？ それに背中から翼のような物が生えているんだけど？」

「セラ姉様にプレゼントするの〜」

「え、ちょっと待って！ 絶対怒られるよ！」

制止の声など聞こえないかのように、アイリスは部屋を出ていった。

「走ると危ないよ！」

去り際のアイリスに慌てて告げる。さすがアイリスと言うべきか、僅かな時間でもう階段に差し掛かっていた。

階段を駆け下りる音が聞こえる。さて、妹は何分後に帰^還つて来るのか。

第二話 魔導具製作

一人になったので作業を再開し、一時間と掛からず絵本を仕上げた。後は今度アイリスが来た時に読み聞かせるだけだ。

ちなみに絵を渡しに行ったアイリスは現在庭で遊んでおり、セレア姉さんと追いかけて楽しんでいる。

案の定怒られて、逃げた先が庭という訳だ。危険のないようにメイドが一人付き添っているので、問題はないだろう。

何はともあれ絵本は完成した。次は魔導具製作に移りたいと思う。

渡された専門書の内、一冊は読み終えたので、まだ手を付けていない本を開いた。

最初は実用的な本という体裁^{ていさく}だったが、章が進むにつれ、魔導具の歴史や魔導言語についての考

察、力を持つ魔導文字の組み合わせ等、話が脱線していた。

語りたいことが多いらしく、後半は著者の魔導具への愛がびつしりと書き記されていた。

先ほど読んだ本がしっかりした物だっただけに、驚いてしまった。

それでも、世に出回っている魔導具については刻むべき文字が記されていたので、それを参考にして同じ物を作製することにした。

物作りのために取っておいた布を机に持ってきた。

今から作るのはマジックバッグという名の魔導具だ。袋の中に異空間を生み出して、そこへ物を仕舞う道具らしい。

随分と便利そうな魔導具だが、危険はないのだろうか？

そう思いながら記述を読むと、どうやら命ある物は収納できず、尚^{なお}且つ一定以上の重さの物は仕舞えないのだとか。

マジックバッグの作製方法に目を通すと、『異空間作成』『生物の収納を禁ずる』『収納容量は百キロ』という魔導文字で書かれた三つの文言が読み取れた。

この言葉を布の内側に刻み袋を作ると、魔導具になるらしい。

パソコンのプログラミングと似たような理屈だろうか。

このような魔導具を作るまでに、どれほど年月がかかったのか見当がつかない。

マジックバッグは過去の文献^{もと}を基に作製に成功した物らしく、現代の研究者達はこの文字の意味

を理解できないようだ。

そのようなことが記されていた。

魔導具は扱いを間違えれば非常に危険だとも書かれている。意味の分からない言葉をつなぎ合わせ、しらみつぶしに実験しているのだ。中には危険な語句もあるだろうが、それも刻むまで分からない。研究者が危険に思うのは当然だろう。

それでも魔導具の良さを書き連ねているあたり、魔導具に対する著者の並々ならぬ思い入れがひしひしと伝わってくる。

著者はハンス・アルペラードさん。

どうやら他の魔導具専門書も全てハンスさんの著書のようなのだ。それほど世に魔導具のことを伝えなかったのだろう。

最後のページに発行日が記されており、この本が出版されたのは三年前なのだと分かった。

先ほど読んだ本も確認してみたところ、こちらは二年前に刊行されたらしい。

「取り敢えず、魔導具を作ってみよう」

気合を入れるため、声に出してからペンを手に取った。白い大きな布を広げてその中心部分に文字を刻む。

刻まれた魔導言語は、魔導具となった本体が壊れなければ消えることはなく、文字を刻んだ本人の魔力によって消すことが可能らしい。

つまり、マジックバッグとなった袋を切ったりしなければ、ずっと魔導具として使い続けられるということだ。

初めての魔導具作りなので慎重に、そして書物通りの文字を刻む。

まずは日本語の『異空間作成』という文字を思い浮かべ、それを魔導文字で布に刻みたいと念じる。すると、腕が自然に魔導文字を書き始めた。

勝手に手が動くという感じではなく、あくまで自分の意思で動かしている、といった感じだ。

今ではもう慣れたが、初めてこの力を使った時は驚いた。馴染みのないはずのアドリビヒト語がすらすら書けてしまったことに仰天し、思わずペンを投げてしまった。

文字を書くにつれて身体から徐々に力が抜けていく。

この世界では、身体を動かすにも魔力が不可欠と言われている。たとえるならば、血液と同じように体中に流れているイメージだろうか。

この魔力が一定ラインを下回ると、身体を守るために強制的に魔力の排出が止められ、気を失ってしまう。

これを魔力切れと呼び、魔力が減っていく過程で気分が悪くなることを魔力酔いと言う。

自分はこの現象を今まで起こしたことがない。

魔力の操作はできるが魔法は使えないので、魔力酔いを起こすほど魔力が減ることがなかった



のだ。

しかし、今その現象が我が身に起きている。

自分の魔力量がどれほどなのかは分からないが、体感的には一文書いただけで三割は消費した。

「はあ……はあ……頭痛い」

一旦ペンを置き、痛みを抑えるように頭に手を当てた。

魔力消費がこれほど辛いものだとは知らなかった。書物に今一度目を通して、魔導具を作るにあたり、どれほどの魔力が必要なのか調べてみる。

「え!？」

つい大きな声を上げてしまった。

読み飛ばしていたところに「魔導言語を一文刻むのに消費する魔力は、平均的な魔法使い十人分の魔力量に匹敵する」と記されていたのだ。

一番大事な部分を読み飛ばしてしまったことも驚きだが、自分の魔力量が結構規格外かもしれないことが驚きだ。

それに加え、魔導具の作製が全く行わない理由も判明した。

本来であれば魔導具製作には相当な時間、あるいは人数が必要なのだろう。

更に、高度な知識が必要なので作製できる人も限定されるという。著者のハンスさんもさぞ優秀な魔法使いなのだろう。

減った魔力は時間と共に回復していく。その回復速度は人によって異なるが、二日から三日経てば消費された魔力は完全に元通りになる。

魔力保持量は人によって差があるらしいが、魔力を消費すればするほど増えていくとされている。例えば、魔法の練習をずっと続けていると、魔力保持量も増えていくのだ。

なので、今日はこのまま魔導具製作で魔力を使い切れば、魔力の保持量が増幅されるだろう。

日本語と比べると魔導文字は一単語あたりの数が多い。アドルリヒト語はその魔導文字よりも多いのだが。

先ほど『異空間作成』の文字を刻む際消費した魔力量から計算すると、残りの『生物の収納を禁ずる』『収納容量は百キロ』を刻む分の魔力までならギリギリありそうだ。

頭痛と戦いながら残りの文字を刻んでいく。それにしても、これが魔力酔いという現象なのか。

「頭痛い……頭痛薬の作り方調べておけばよかった……」

悪寒に耐えながら独り言を呟く。現在は生まれ変わる前とは違い、年相応の言葉遣いになっている。

意識して幼い話し方にしたお陰で慣れてきたのだが、時折子供らしくない口調になってしまう。

確か、生前の一人称は年と共に変わっていったと記憶している。だが、今は七歳で親の目もあるので自分のことは「僕」と言うようにしている。

記憶があると言ってもこの一人称を恥ずかしいと思うほどではないし、そもそも生前の記憶に意

識が引つ張られている訳でもない。

だが、それでも多少影響はあるので家族やメイド達からは、大人びていると思われるようだ。

まあ、妹のアイリスが生まれてからは兄らしく振る舞いたいということにして、前世の記憶のことは誤魔化しているが。

前世の記憶があっても今の自分はユータ・ホレスレットだ。もう、湖上優太ではないのだから、固執しても仕方がないだろう。

湖上優太の人生は満喫したのだ。これからはユータ・ホレスレットとして生きなくてはならない。

とまあ、頭痛を誤魔化するために色々と考え事をしていたが、痛いものは痛いのであまり効果はなかった。

ペンを手放し、子供らしく芋虫のように絨毯の上を這いずり回っている。

十数分ほど芋虫を演じていると痛みは徐々に引いていった。動けるくらいになったので、最後に魔導言語を刻み終えた布を、袋状に縛った。これで魔導具マジックバッグは完成だ。

第二話 注がれる愛情

「本当に大丈夫ですか？ 無理をなさっているではありませんか？」

ニーナが心配そうな顔でこちらを見る。

マジックバッグを作った後、絨毯の上で眠っていたのを見つかり、ベッドに運ばれてしまったのだ。

「ちよつとはしゃぎ過ぎて無理しただけだから、少し休めばすぐ元気になるよ。心配してくれてありがとう」

ベッドに寝たまま、ニーナに告げた。

「それなら良いのですが……昼食は私が持つて参りますので、今日はゆっくり休んでくださいね」心配そうな表情を浮かべたニーナは、部屋を出るまでの僅かな間に何度も振り返る。

彼女があのような様子なら、いずれエレノール母さんにも話が伝わるだろう。

申し訳ないと思いつつ目を閉じる。そして、寝て魔力の回復に努めようと思っていたら、母さんが思いの外早くやって来た。

「ユウ！ 倒れたって聞いたけど大丈夫なの!？」

ノックをするのすら忘れて部屋に飛び込んできた母さんは、一目散にベッドに駆け寄った。

「母さん、心配かけてごめんなさい。ちよつとはしゃぎ過ぎただけだから、心配しないで」

ニーナから話を聞いてすぐに来てくれたのだろう。

まだニーナが去ってから数分しか経っていない。

「本当に、本当に大丈夫なの？ 無理してない？ 何か欲しい物があつたら言ってもいいのよ？」

そうだ、お歌を歌ってあげましょう！ 牧場から市場へ売られていくかわいそうな子牛の歌なんだから——」

「心配してくれるのは嬉しいけど、歌のチョイスには悪意しか感じないよ」

先ほどのニーナとは比べものにならないくらい、おかしな心配の仕方だ。

取り乱した姿を見ると少し罪悪感が湧くが、こんなに自分のことを思ってくれているのだと思つと嬉しい。

売られていく子牛の歌は喜べないが。

「あら？ 突然笑ったりしてどうしたの？」

「なんでもないよ。ただ嬉しかっただけだから」

母さんは焦っていたから少し変だったけど、心配をしてくれたのは純粋に嬉しかった。

母さんの優しさが伝わって心が温かくなる。

「ちよつと疲れたから、少し眠るよ」

「そう、おやすみ。ユウ」

「おやすみなさい」

目を閉じると、母さんが頭を優しく撫でてくれた。

次第に微睡^{まどろ}んできて、目を閉じてから意識を手放すまでに時間は掛からなかった。